
緋弾のARIA 交わらぬ姉妹の道

Pety

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 交わらぬ姉妹の道

【Nコード】

N4169BA

【作者名】

P e t y

【あらすじ】

二人で一緒に最高の武偵になろう。

かつて交わした約束が叶う事は永劫ない。 違えた道は二度と戻らず、待ち受ける未来には争い合う運命のみ。

資格を受け継いだ姉と、能力を受け継いだ妹。 全ては、最良の道を進る、ただそれだけの為に……。

注：この作品の主人公は、公式設定の妹とは別人です。もし出てきたら修正する可能性があるかも……。

プロローグ（前書き）

思いつきの作品故、ストックが尽きましたら更新は不定期になります。

読んでくださる方は、広い心でまったりとお待ちください。

プロローグ

人生においては僅かな年数。

しかし今となつては遠い過去。

『いい？ アリア、マリア。 貴方達は将来、一緒に戦い、信頼出来るパートナーを見つけるのよ？』

大好きなお母さんの言葉。

物心ついた時から何度も繰り返し言われた事だ。

『いつか武偵になるなら、貴方達に絶対になるからね？』

私達の頭をそつと撫で、優しく微笑みながら語りかける。

私は、そんなお母さんの仕草が好きだった。

『そんなのいらないもん！ アタシとマリアが一緒になれば、怖いものなんてないんだからっ！』

隣にいる私のお姉ちゃんが、無邪気に笑って腕を組んでくる。

お母さんと同じくらい大好きなお姉ちゃん。

何をするにも二人一緒に、離れる時間なんて殆ど無かった。

『うふふっ、そうねえ。　　アリアは運動が得意だし、マリアは頭が
いいものね。』

『そうよママ、アタシ達がパートナーになれば、悪い奴らなんてみ
ーんな牢屋行きよっ！！』

得意げに胸を張るお姉ちゃん。

私もお母さんも、その様子に笑っていた。

それを見て、お姉ちゃんは怒ったけど、はたから見ればそれすら微
笑ましい日常の風景だろう。

『いいわねマリア、アンタが考えてアタシが捕まえる。　　二人で最
高の武貞になるんだからね！！』

『うん、わかった。　　もっといっぱい勉強して、お姉ちゃんのパー
トナーになるね。』

『あらあら、頼もしいコンビが出来ちゃったわねえ。』

お互いに向き合って、笑いながら約束する私達。

それを見て優しい笑みを浮かべるお母さん。

家の人達には、いつも蔑まれてばかりだった。

父親ですら、殆ど関わる事のない振る舞いをして、私達を遠ざけていた。

欠陥品姉妹とその母親。

それでも、三人で過ごすその時は、笑顔が溢れていて。

二人で武貞を目指すと決めた時は、未来に胸を馳せていた。

プロローグ（後書き）

一作目の完結を待たずして始めてしまったぜ！！

しばらくストックはありますが、すぐに無くなりますWWW

二の次に書いているので、クオリティに期待はしないでください。

それでは。

一話

コツコツと、床を踏みしめる靴の足音が響く。
薄暗い通路の真ん中を、一人の少女が歩いている。

光源は細い通路の両脇、壁の下の方に設置された証明が足元を照らすのみ。

それが通路の先までズラリと並んでいる。

通路の幅は人が三・四人通れる程、その真ん中を少女は歩いていた。
薄暗い故に、少女の顔はハッキリとは見えない。

しかし、僅かな光を反射し、紺碧色の瞳が美しく輝いている。

「おやおや、ようやくお帰りかのおナンバー2殿？」

そんな少女に、通路の先の十字路から現れた人影が声をかける。

「今回は随分と時間が掛かったのではないか？ 予定よりも二日も遅れるとは。」

そう言つて、少女の目の前に立つた女性は、可笑しそうに笑つた。
第三者が見れば、今の状況は色んな意味で不可思議な光景だろう。

それというのも、まずこの二人、服装からして真逆である。

少女が、フード付きの黒いロンゴートで身を包んでいるのに対して、
女性の方は露出度が尋常じゃない格好である。

腰と胸部を薄い布で覆っているだけで、服らしい服は着ておらず。

手首や足、首や頭部に金ピカな装飾を付け、一言で言えば古代エジプトの王族なんかを想像すれば分かりやすい感じの見た目なのである。

二人のいる空間が、暑いのか寒いのか判断に困る真逆っぷりだ。

「パトラ……。」

「もしか今回の任務、お主には荷が重かったのかのう？ マリア。」

対峙する二人、マリアとパトラ。

しかし、パトラの目に対抗心のようなものが見える反面、マリアには何の感情も見えない。

むしろ表情が面倒そうに見える。

「任務終了間近に、教授フロフェンに追加の任務が言い渡されただけです。遅れた訳じゃありません。」

「ぬ、ぬう……。」

溜息混じりに言い返され、たじろぐパトラ。

「それよりも、教授の所に行くから、通してくれませんか？」

「くうっ……ふんっ！」

悔しげに呻き、そっぽを向いて道を開ける。

その横を通り過ぎ、教授の部屋へと向かうマリア。

しかし、二メートル程離れた所で再び止まる。

「そう言えば、何で貴方が私の任務の予定を知っているのですか？」

「なっ!?!」

振り向いたマリアに投げ掛けられた質問に、何故かビクツと驚くパトラ。

その顔に、若干赤色に染まっている。

「わ、妾わいがそれくらい知ってるのは当然じゃろ!?!」

「概要ならまだしも、終了日程まで知ってるのは当然じゃないけど
思いますか?」

「そ、それ・・・は・・・。」

「大体、他人がこなしてる任務内容を細かく知るなんて、普通の組織ならともかく、ここじゃ誰もやらない事ではありませんか?」

「だ、だから・・・あの・・・その・・・。」

ゆっくり確実に追い詰めていくマリア。

今やパトラの顔は、まさに林檎のように真っ赤である。

「え、ええいつ! やかましいわっ! そんなの妾の勝手じゃろう
がっ!?!」

逆切れし、叫ぶパトラだが、対するマリアは涼しい顔。

「そう、まあどうでもいいですが・・・。」

「っ!・・・くう、いつもながら忌々しい奴じゃ!?!」

後ろを向き、ズンズンと音を立てて歩いていくパトラ。
そんな背中を見つめ。

「パトラ。」

「なんじゃ!?!」

「・・・ありがとうございます、ただいま。」
「!!!・・・うっ・・・おっ・・・。」

目に見えて硬直したパトラに背を向け、歩き出すマリア。

パトラが再起動した時には、既にエリアは通路の先に消えており。

「むむう、やはり最初からすべて計算づくかつ！ まったく・・・。」

一人毒づきながら、自室へと帰っていった。

パトラと別れた私は、ある扉の前で止まり、扉をロックする。

「入りたまえ。」

「失礼します。」

扉の向こうから品性が滲むような声で返答され、ゆっくりと入室する。

部屋の中は、先程までのゴツゴツした鉄の通路と違い、ゆったりとした空気が漂う洋室だ。

床には厚い絨毯が敷かれ、柔らかそうなソファが置いてある。

部屋の住人はその奥で、見ただけで高級な物だと素人でも分かりそうな革製の椅子に腰掛け、机の上にある書類を見ていたようだ。

英国紳士の部屋、と言えば想像しやすいかもしれない。

細かいイメージは個人差はあるだろうが。

扉の外と中で、まるで別世界の扉をくぐったかのような気分になる。

「神崎・H・マリア、ただいま戻りました、教授。」

「ああお帰り、マリア。時間ピッタリだね、思ったとおりだ。」

「はい、私も、教授がそう思われるだろうと思いました。」

「やはり、パトラかい？」

「はい。」

第三者が聞けば少しばかりおかしいと思うだろう私達の会話。

しかし二人にとってはいつも通りの風景だ。

「彼女は君が此処に来た時から何かと気にかけていたからね、心配なのだろう。」

「気持ちは有り難いのですが、私ももう心配される程弱いつもりは無いのですが・・・。」

「それは彼女も解っているさ、しかし、人と言うのは頭で理解出来

ても、感情が納得しない事が多い。」
「感情、ですか……そうですね。」

納得出来ない、と言うのは理解出来る。

私も、別に感情の無い機械のような人間ではないから。

心配されること事態は嬉しいが、任務の前後に毎回突っかかって来るのは勘弁して欲しい。

「マリア、君はホームズ家の中で最も私の条理予知を強く受け継いだ者だ。しかし、どれだけ優れた脳を持っていても、推理を組み上げられるだけの素養がなければ意味がない。こればかりは長い時間を掛けて積み重ねる他ない、わかるね？」

「はい、勿論です。」

私の答えに教授、曾お爺様は満足げに頷いた。
私の曾お爺様、シャーロック・ホームズ？世。

武偵の世界で、いやそれどころか一般の世界ですら知らない者はそうそう居ないだろう偉大な人物。

世界一の頭脳を持ち、その卓越した推理力で、数多の凶悪な犯罪者を牢屋に送った最高の探偵であり、現代の探偵である武偵の元となった人物。

現在では伊・ウーと言う名の組織を束ね、表の顔としては凶悪な犯罪者達の集う超人集団の頂点として。

裏ではその圧倒的な戦力を使い、世界中の巨大組織に圧力をかけて封じる、世界の抑止力として活動している。

そんな曾お爺様と私が出会ったのは三年前、私が七歳の頃。

何の前触れも無く、曾お爺様は私の元に表れ、私を此処に連れてきた。

君のお姉さんはね、将来とても大変な試練に立ち向かわなければならぬんだ。

憧れの先祖様に出会い、舞い上がっていた私は、告げられた言葉に驚いたのをよく覚えてる。

それはとても険しく、辛い道のりになるだろう。

ならお姉ちゃんを助けなきゃって、幼い私は慌てたのも、今思い出すと恥ずかしい。

でもね、君のお姉さんにはそんな試練を共に乗り越え、支え合う事の出来る。大切なパートナーが見つかるだろう。そして、残念ながらそれは、君じゃないんだ。

どうして？ お姉ちゃんのパートナーは私だよ？ だって二人で約束したもん。

本当にすまない。しかしね、君にもお姉さんの為にやれることはあるんだよ。

何が出来ると？ 私に出来る事なら何でもやる。

本当に君はお姉さん思いだね。出来るさ、それ以上の事すら君には出来る。何故なら君も、お姉さんと同じくこの時代に必要な存在なのだからね、

お母さんと同じ様に笑い、手を差し伸べてきた曾お爺様。

行こうか。君の姉と、世界を導く、最良の道へ。

目の前の手を取れば、お姉ちゃんとの約束が果たせなくなるのは、何となく感じ取っていた。

でも、それでもいいと思う。

だってお姉ちゃんには、私よりもずっといいパートナーが見つかるって、私も何となく思うから。

お姉ちゃんなら、その人と最高の武貞になれると思うから。

私は武貞にも、お姉ちゃんのパートナーにもなれないけど。

たとえ道を違えても、思いだけは、いつまでも一緒だと思うから。

だから私は、犯罪者の世界へと踏み出した。

きっと、いつかお姉ちゃんと再会する。

そしてそれは、きっと感動の再会にはならない。

武貞と犯罪者。

追う者と追われる者。

絶対に、戦う事は避けられない。

それでも、私に後悔はない。

何故ならこれが、最良の選択だから。

一話

「この子は今日から此処に所属することになった子だ。君に面倒を見て欲しいと思ってるね。」

ある日、曾お爺様に呼ばれて部屋に行くと、そこには一人の女の子がいた。

綺麗な金髪の髪なのだろうが、今は汚れてくすんでいる。

薄い布一枚で、体全体を覆っていて、この子がろくな生活を送っていなかったのが一目で伺える。

「私が、ですか？」

「ああ、年もマリアと同じだし、何より彼女は色々と不安定な状態だからね。他の者たち任せるには不安が残るのだよ。」

「それはまあ、確かに。」

目の前にいる少女は、明らかに私を警戒した表情で見ている、しかしその大半は怯えや不安と言ったものだ。

こんな状態の少女を、基本的に凶悪な犯罪者だらけのこの場所で住まわせるには、人選は慎重にならざるをえない。

ジャン又辺りなら大丈夫だろうが、あの人に人の面倒を見るというのは些ちとか難があるだろう。

必然的に、残るは私だけになる。

「わかりました、お引き受けします。」

「助かるよ、この子の名前は峰・理子・リュパン。君ならもう解るだろうが、かつての大怪盗、アルサーヌ・リュパンの曾孫だよ。」

したがって、彼女は4世にあたる。」

4世、と言葉にされた時、少女の顔が一瞬歪んだのが見えた。なる程、あまり血筋に対していい感情を抱いてないのだろう。

「リュパンの子孫を面倒見ようなんて、何とというか、流石ですね。」

「褒め言葉として受け取っておこう、この子をよろしく頼むよ。」

峰君、彼女が今日から君の世話をしてくれる、マリアだ。」

「……よろしく。」

か細い声で挨拶をし、微かに頭をペコリと下げる。

身体的、精神的な衰弱に加え、栄養失調も酷そうだ。

「よろしく。早速ですが、まずはお風呂と食事ですね、行きましよう。」

そう言って、理子の手を取り、しかし力を入れ過ぎないように優しく引く張る。

因みに、私がホームズ家の人間である事は言わない。

曾お爺様も、先程から自分がホームズ本人である事を気づかせる様な発言をしない事から、暫くは伏せておこうと言うことだろう。

「え、ちよっ……。」

「いいからコッチです。」

戸惑い、おぼつかない足取りで歩く理子を、腰に手を回して支える。半ば抱える様な状態で脱衣所までたどり着く。

「はい、脱いでください。」

「やつ！？ ちよつ・・・まつ・・・！」
「問答無用です。」

驚いて藻掻く理子だが、その動きを逆に利用して布を剥ぐ。
布の下には粗末な下着があるだけで、それもかなりボロボロの状態である。

「脱いだら入りましょう。」

「だから待っててば！ 子供じゃないんだから自分で入れる！」

「十歳は立派な子供です、いいから入ってください。」

「うわぁ！？」

駄々をこねる理子の腰を両手で掴み、持ち上げて風呂場に入る。
本当に同い年なのかと疑うくらいに軽い。

まずは鏡の前に座らせて。

「今度は頭と体を洗います。」

「だから分かるって言ってるでしょ！？ 子供扱いすんなっ！」

「はいはい、じゃあ早く洗ってください。」

「くうう〜っ！」

悔しそうに顔を歪めたあと、シャンプーの入れ物から適量を手に出して、髪を洗い始める。

しかし、その動きは余りにも鈍重で、力がなく、泡が全く立たない程だ。

「私が洗いましょうか？」

「じ、自分で出来る。」

「力、入らないんでしょう？」

「……………」

押し黙る理子。

息遣いが若干荒く、つまりは手を少し動かしただけで体力を消耗する程に弱っている。

「私は貴方の世話係、せめて体調が万全になるまでは頼ってくださいですよ。」

「……………それは……………理子がリュパンだから？」

「……………」

ポツリと、消え入りそうな声で呟かれた言葉は、しかしこの空間にハッキリと響いた。

それは理子を紹介された時に、おおよそ察する事が出来た、この子の抱えるもの。

「理子の曾お爺様が昔の凄い人で、理子はその曾孫だから？ リュパンの4世だからでしょ？ だからこんな風に構うんでしょ？ 優秀な遺伝子は大切にしたいから。そうじゃなきゃ犯罪者ばかりの伊・ウーが、こんな才能のない理子を入れる筈ないもん。」

「？ 才能がない？」

あの世紀の大怪盗の曾孫が、何の才能もないということ？

「そつだよ、理子は曾お爺様から何の才能も受け継がなかった。

だからアイツにいつもいつも出来損ないの……………欠陥品って……………呼ばれ……………て……………ずっと……………道具扱い……………されて……………」

言葉を紡ぐに連れて、理子の声が弱々しく、泣きそうな声が変わっ

ていく。

いや、俯いていて見えないが、実際に目に涙を浮かべているだろう。アイツ、と言うのが誰かは分からないが、相当辛い目に会わされたのは明白だ。

少しづつ、すすり泣く声まで聞こえて来たのだから、よっぽど恐怖が染み付いてるんだろう。

「確かに私が貴方を世話するのは、教授に言われたからです。」
「っ！……うくっ……ヒック……」

私の言葉を聞き、背中をビクツと震わせ、僅かに鳴き声が大きくなる。

誰かに自分自身を認められる事を求め、望んでいる。

諦めようとして、しかし捨てきれない願い。

「貴方がリュパン4世である事は覆らない事実ですし、世の中で優れた血統を持ち、優れた才能を持つ者が重要視されるのは当たり前前の事。」

社会で求められるのは、大まかに言えばいざという時に換えの利く捨て駒と、結果を出す能力を持つ優秀な人材だ。

それを不公平だなんて言った所で、負け犬の遠吠えにしかならない。

「……え？……」

頭に置かれた私の手に、キョトンとした顔で私の方に振り返る理子。涙が溢れ、目元が赤くなって少し腫れている。

「貴方がリュパンの才能を受け継いでいない事と、貴方が無能であることはイコールじゃない。」

訳が解らないと言った様子で見返してくる理子。
可愛らしい仕草に、思わず笑みがこぼれる。

「貴方にリュパンの才能が無くとも、貴方には貴方の持つ才能がある。」

「理子の・・・才能?・・・」

「そう。」

あんまりこう言うのは言いたくないんですが、とても気恥ずかしいので・・・。

「それをこれから見つければいい、今は何も出来ない子供でも、いつかはリュパンを超える何かを成せばいい。」

「曾お爺様を・・・超える・・・」

「それに、人間才能が無くても、努力でなんとか出来ちゃうものですよ。」

結局、自分の才能を見つけ、引き出し、上手く活用出来た者が勝ち組なのだ。

才能があってもものし上がれないのは、活用する能力が無いって事。

自分の才能に気付かず、埋もれさせたまま無為に人生を終わらせる人間が、この世にどれだけいる事だろう。

才能があっても大して努力をせず、努力する人間に負ける事がどれだけ多いだろう。

私や姉さんも、ホームズ家の中では欠陥品。

私は推理力を受け継いではいたけれど、子供が持っていて誰も気付かない。

曾お爺様に言われて通り、教養がなければ推理など出来ない。

五歳にも満たない子供が優れた頭脳を持っていても、少し頭の良い程度にしか周りには映らないのだ。

故に、当時は体が弱かった私は武偵になれない出来損ない扱いだっ
た。

でも、フタを開けてみればこの通りだ。

曾お爺様には条理推理の後継者として迎えられ、伊・ウーではサブ
リーダーの如き地位を与えられた。

才能など、誰に何が宿っているか想像もつかないと実感した。

姉さんも、順調にに頭角を表し始めている。

まだ十歳なので表舞台には出ていないが、こと戦闘に関しては既に
相当のレベルだと聞いた。

詳しい事は知らないけれど、曾お爺様が太鼓判を押していたから問
題はないだろう。

それでも、相変わらずホームズ家との折り合いは悪い。

要は、結局世界なんて出来ちゃったもん勝ちなのだ。

「リュパンの才能ではなく、貴方の持つ才能で強くなって、いつか
貴方に酷い仕打ちをした奴を見返せばいいじゃないですか。 リュ
パンの遺伝子なんて、貴方の強さには関係ないって。」

「理子の、強さ。」

僅かに拳を握り締め、それをジツと見つめる理子。
その目に、微かに強い光が灯り始めている。

「理子に・・・出来る・・・かな？」

「それは貴方次第、しかし幸い、此処は強くなるにはうつつつけの場所です。なにせ世界の化け物達が多く集う場所ですから、色々学ぶには事欠きません。」

「・・・うん・・・そう、だよね。」

うん、うんと、しきりに頷いて、確かな光を目に宿した理子。
もう大丈夫そうだ。

「決めた、理子はここで強くなる。強くなって、ブラドを倒す！」

「ほお、ブラドですか。また随分と大物ですね。」

確かアルセーヌ・リュパンがジャンヌの先祖と共闘しても倒せなかった相手だ。

個人でブラドを倒せる人間なんて、この世に数える程しか居ないだろう。

それ程の者を倒せば、確かに理子を無能だなんて誰も言えなくなるだろう。

「目標はとても高いですね。」

「それでも、やるんだ。理子は、出来損ないじゃないって証明してやる！！」

先程までとは別人のような覇気を出して誓う理子。

正直な所、素っ裸なので雰囲気は四割減だ。

「それじゃあ立派な決意を表明した所で、まずは体を綺麗にしまし
ようね。」

「へ？ あ、うん。」

正気に戻ったのか、少し恥ずかしそうに座り、大人しく身を委ねる。
優しく、しっかりと泡を立て、髪についた汚れを剥がしていく。

「流しますよ。」

「うん。」

ゆっくりと湯を掛け、泡を落とす。

そこには、輝かんばかりの綺麗な金髪があり、先程のくすんだ色と
は天と地の差である。

「髪、綺麗ですね。」

「え！？ あ、そのっ……あり……がとう。」

褒められるのに慣れてないのか、耳まで真っ赤になっている。
内心で微笑みつつも、今度は体を洗っていく。

体中に細かい擦り傷などがあり、所々に真新しい傷跡が存在し、こ
の子がつい最近まで暴力を受けていた事が見て取れる。

「少し染みるでしょうが、我慢してください。」

「平気、痛いのは慣れてるから。」

しっかりと全体を洗い、湯で流す。

終わった頃には、まるで別人のように印象が変わった理子がいた。

輝かしい金髪、スベスベな肌も合わさって、人形のような可愛らしさがある。

傷跡が少々目立つものの、時間が経てば自然と消えるだろう。

「それじゃあ風呂に入って疲れを取りましょう。」

「わかった。」

すっかり素直になった理子と、湯船に浸かる。

お湯の心地良さに、つい息が漏れる。

「はづつうう~~~~?」

「?」

突如横から響いてきた嬌声紛いの声に、横を見てみると。

理子が果てしなくだらしない顔で骨抜きになっていた。

目がトロンとしていて、両の頬がうつすらと染まり、顎から下を全部湯の中に入れた状態で、体が大の字になって湯の中でゆらゆらと浮かんでいた。

「生き返るうう~~~~?」

「老人ですか。」

私の声は全く聞こえていない様子。

「……ねえ。」

「何ですか?」

と思ったら真面目な声で話しかけてくる。

少し緊張も混じっている。

「あなたの事、その……ま、マリアって……呼んでいい？」
「構いませんよ。」

「そ、そう！　じゃあマリアも理子の事、理子って呼んでね？」

「分かりました。　それでは改めて、よろしく、理子。」

「うんっ！　よろしく、マリア！」

私の言葉を聞いて、理子は花の咲いたような満面の笑みを浮かべた。

二話（後書き）

とまあこんな感じですよ W W W W

感想はいかようにでもどうぞ。

因みに作者は銃の知識とか無いんで、wikiで付け焼刃にもならない情報でやりくりします。

アドバイスや知識のご教授などいただけると嬉しいです。

なにかオススメとかカッコイイ銃とかの情報を求む！！

それでは（＾　|　＾）ノ

三話

理子が伊・ウーに来て、早二年経った。

宣言通り、理子は来る日も来る日も研鑽を重ね、多くの技術を学んでいった。

特に彼女が得意としていたのは、声帯を操作しての変声術と、突出した変装術。

これは伊・ウー内での二つの派閥である主戦派イグナティスと研鑽派ダイオのうち、研鑽派の人達に一目置かれている。

そのため、理子に術を教わろうとする者が多々出始め、伊・ウーの中でしつかりと足場を築いている。

それに加え、理子の持つ青い十字架ロザリオ。

理子の母親の形見らしく、それには微量の色金イロカネが含まれているらしい。

その力によって、理子は髪の毛を手足の如く自在に操る事ができ、ナイフ等を使って攻撃することが出来る。

使える手が一つ増えただけで、戦術は大幅に広がる。

その優位性を生かした戦い方によって、理子は組織の中でこそ最下級ではあるものの、それなりの実力を身に付けつつあった。

性格も、出会った時とは違い、とても明るく快活なものになっている。

しかし、それでも表面上の事であり、ブラドに対する根本的な恐怖心などは拭えてはいない。

これだけは、実際に本人を倒して乗り越えなければ払拭することは出来ないだろう。

話は変わるが、最近日本の文化に興味を示し、特にオタク文化に対する情熱は最早異常の一言だ。

熱心になれる趣味を見つけられたのは嬉しい事ではある、事ある度に付き合わされるので、正直疲れる。

メイド喫茶とやらに連れて行かれた時は特にキツかった。

想像して欲しい。

オタク達がひしめき、メイド達がニコニコ笑いながら働く空間の中、僅か十二歳程度の女の子二人が来店し、メイドと一緒に注文の品に向かって「おいしくな〜れ？」なんて言っている場面を。

余りにもシユールだ。

いや、人によつては微笑ましいなんて言いかねないけど。

しかし、それが他人事でないとしたら？

無理やりゴスロリ服を着せられ、メイドと三人でそんな事をやらされたら？

死ぬ程恥ずかしいなんて次元じゃなかった。

しかも、理子がいつの間撮ったのか、その時の私の様子を写真に収め、あまつさえ曾お爺様やジャンヌに焼き増しして配っていたのだ！

任務帰りの時に曾お爺様の部屋に言った時に、突然写真を見せられながら・・・

『とても可愛らしいじゃないか、似合っているよ。』

などと言われ、顔から火が吹き出しそうになった。
ジャンヌの場合。

『ぶつ、くくくつ・・・メ、メイド・・・つぶつはっ・・・!!』

といった具合の反応をされ、とりあえず全力のボディブローで沈めておいた。

犯人である理子には、アイアンクローで頭蓋骨に会心のダメージを与えておいた。

ちなみに、曾お爺様は既に盲目だ。

にも関わらず何故写真の情報を読み取れるのか。

それは、写真に使われる塗料の成分を嗅覚と触覚で正確に読み取り、その僅かな違いによって色や景色、はては人物までもが頭の中に思い描けるらしい。

もう、人間の成せる領域ではない。

このように、最近の理子は色んな意味で絶好調であり。
当時のような情緒不安定さは無くなっている。

しかし、だからと言って油断は出来ない。

ブラドの事を抜きにしても、ここは伊・ウー。

世界でも指折りの超人達が集う、世界からすれば犯罪者の巣窟なのだ。
だ。

理子だって、四六時中ここに留まっている訳では勿論無い。

半年程前から少しずつ任務を言い渡される様になり、既に二十件程

の犯罪をこなしている。
当然武偵に目を付けられる訳だ。

目を付けられると言っても、理子の場合変装や変声の御陰で素顔は晒してないのだが。
現行犯で捕まれば元も子もない。

捕まれば組織の情報が当然漏れる。
理子を信用する云々は別として、無理やり喋らせる手段などいくらでもあるのだから。

それによって、万が一にでも私の事を知られるのは不味い。
世間では私は伊・ウーが起こした事件に巻き込まれ、死亡した事になっている。

これは、ほんの僅かでもお姉ちゃんに伊・ウーに対する敵意を抱かせる為の処置だ。

同時に、私が伊・ウーで自由に活動するための処置でもある。

私は現在、世間ではフリッグと言う名の犯罪者として活動している。
フリッグとは曾お爺様が考えた名で、北欧神話における主神オーディンの正妻にして、未来を予知する力を持つと言う神々の王妃の名である。

伊・ウーと言う組織のトップの右腕と言われ、条理推理を受け継いでいる事から付けたのは明白。

曾お爺様曰く。

「まさに人類の中で君が最も相応しいと思うよ、我ながら会心の出来だと思うね。」

とのこと。
さりげなく裏世界に流していたらしく、今ではいつの間にか二つ名まで付いていた。

「傷無きずなしのフリッグ」

この途轍もなくやってしまった様な雰囲気を感じるのが私の二つ名である。

由来は、私が本格的に活動してから一度も武偵やその他の警察組織から傷を付けられた事が無い、と言う事から付けられたもの。

条理予知は、未来予知に限りなく近い推理。

つまりは、対峙している相手がどんな策を考えているかというのは勿論のこと。

銃に関しては、相手が狙っている場所、撃つ瞬間のタイミング、近接に関しては、踏み込むタイミング、仕掛けてくる攻撃パターン、そしてそれがフェイクか否か。

そう言ったものを含む全てがお見通しなのだ。
ならば相手の攻撃を受けるも避けるも朝飯前であり、此方の攻撃を好きなときに当てるのも思い通りと言う訳だ。

故に、何をやっても傷一つ付けられない化け物、「傷無のフリッグ」などと呼ばれ始めた次第である。

実際は、条理推理を使った戦いを身につける迄に、傷など腐るほど負っているのだけだ。

今私は曾お爺様の部屋へと向かっている。

任務ではないが、今日の予定の前に打ち合わせ、と言うよりも確認をしておく事がある。

予想はしているが、万が一と言う事もある。

条理予知を受け継いでいると言っても、私はまだ曾お爺様程の完成度ではないのだから、過信するつもりは毛頭ない。

扉の前に着き、いつもの様に軽くノックする。

「入りたまえ。」

「失礼します。」

何度も繰り返されたやり取り。

入室すると、曾お爺様は紅茶を飲んでるところだった。

「マリアか、用件はなんだい？」

「言わなくてもお分かりになっているでしょうに、態々聞くのですか？」

「老いた人間には、人との会話も数少ない娯楽の内なのだよ。」

「残念ながら、私にはもう暫くは実感出来そうにありませんね。」

「ふふっ、そうか。」

可笑しそうに笑う曾お爺様は、紳士の鏡の様な普段と違い、何処か子供のような雰囲気は何える。

前に緋弾の継承条件を聞いたとき、子供っぽい性格である必要があると聞いて、最初は違和感を覚えたものだが、今なら納得出来る。

もともと、本人はあまり自覚していないようだけれど。

「ブラドの事だろう？」

「はい、殺さずに撃退、でよろしいですね？」

「ああ、そうしてくれ。彼にはその内、伊・ウーに入ってもらおう予定だからね。」

「最初から迎え入れないのは此方の実力を示す為であり、あくまで向こうから入って来る様に仕向けた方が都合がいい。間違いありませんか？」

「満点だよマリア。他のメンバーと同じく、神崎かなえへの濡れ衣工作に加担させる為にね。」

お母さんの名前を聞き、少しだけ胸が苦しくなる。

お姉ちゃんを、自分を守るくらいに強くする為に。

最良の道を進む為に。

私は、自分の母親を犯罪者に陥れるのだ。

事実上の終身刑を。

最終的には釈放される手筈とは言え、だからと言って許される事ではない。

当然、お姉ちゃんはお母さんに濡れ衣を着せた者達を恨むだろう。そしていつか、「傷無のフリッグ」の前にも立ちふさがるときが来る。

誰よりも勝る、最高のパートナーと共に……。

「しかし、態々確認せずとも、君なら全て分かっているだろうに。やはりまだ自信が付かないかい？」

「自信がない、と言うよりも過信するつもりがないだけです。」

「相変わらずだね。まあいい、それよりも……。」

「ええ、そろそろ……。」

いいかけた瞬間、伊・ウー全体に響きわたる轟音、そして振動。部屋の家具がグラグラと揺れ、仕舞ってあるティーセットがカタカタと音を鳴らす。

「では、行ってきます。」

「ああ、よろしく頼むよ。」

しかし、私は慌てる事無く部屋を後にする。

向かうのはこの場所、原子力潜水艦ボストーク号の甲板だ。

「推理通りの時間ですね……」「無限罪のブラド」。

「その辺りで止めていただきたいのですが。」

「ああん？　なんだあお前は？」

甲板に到着すると、既に何人かのメンバーが倒されていた。見たところ、主戦派が十人、研鑽派が七人といったところ。

どうやら最下級のメンバー達のようなのだが、彼らとて、世界にとっては恐ろしい化け物犯罪者であることは変わらない。

それを僅か十数分程で倒すとは、噂通りの実力の様だ。

「僭越ながらここ、伊・ウーのサブリーダーの様な役職を受け持たせていただいている者です。不本意ながら、「傷無」の二つ名を頂戴しています。」

「ほおう、まさかあの「傷無」がこんな小娘だったとはなあ。流石の俺様も驚きだ。」

私の名を聞いた途端、獲物を見つけた肉食獣の様な目を向けるブラド。

いや、最初から外見は肉食獣以外の何者でもないのだけれど。

ブラドは大昔から、多くの遺伝子を取り込む事で肉体を強化、延命してきた吸血鬼だ。

大方私の遺伝子にでも狙いを付けたか。

「把握してはいますが念の為お伺いします。用件はなんでしょう？」

「決まってる、俺様の人形であるリユパン4世を拾いに来た。」

「拾いに、ですか。どこまでも物扱いなんですね。」

「当たり前だ、アイツは何の才能も持たない、優秀な五世を生み出す為の道具なんだからなあ、ゲアバババババァッ！」

心底愉快そうに高笑いをするブラド。

怒りはない、元からこう言う人物（？）だと分かっていたのだから、今更怒りなど沸かない。

むしろこれからも自分の思い通りに事が進むと信じて疑ってないような様子を見てみると、滑稽に見える。

自分が負けるなどとは微塵も考えていないだろう。

「そうですか。 ですが残念ながら、彼女を貴方に渡す事は出来ません。」

「ああ？」

「彼女は既にこのメンバーであり、これから必要な人材なのです。今貴方に差し出す事は出来ないと言ったのですよ。」

「ほお、どうやら死にたいらしいなあ、ガキが。」

ニヤリと、一層顔を醜く歪め、此方に歩いてくるブラド。

それに対し、私はここに来る途中に武器庫から適当に引っ掴んできたアサルトライフルを構える。

片手で無造作に撃ち放ち、ろくに照準はつけていない。

数十の弾丸を浴び、しかしブラドはそれを避けようとせず、左腕を顔の前にかざすだけで前進してくる。

「ゲハハハハ！！ 俺様にそんなオモチヤは通用しないぜ！？」

「知ってますよそんな事。」

目的を果たした私は、ライフルを横に投げ捨て、今度は懐からベレッタ90Twoを取り出し、正面に駆け出す。

それを只の突撃と取ったのか、ニヤリと笑って腕を振りかぶる。

「手足を潰してから持ち帰ってやるよガキィ！」

「無駄に歳をとってる割には単細胞ですね、御陰でとても読みやすい。」

振り下ろされる瞬間に、ブラドの両肩、右脇腹に浮かぶ紋様に撃ち込む。

続いて振り下ろされた腕を回避し、直後に跳んで腕に乗り、駆け上がりながらブラドの脳天と右目に一発ずつ撃つ。

ブラドの頭が僅かに仰け反り、片目を潰された痛みで呻く。

肩までたどり着いた所で再び跳躍、ブラドの真上に、上下逆さまの状態で目が合う。

憎々しげに此方を見るブラド、その口の中。

ぶ厚い舌に描かれた文様に、最後の一発を撃つ。

最初からこの銃には六発しか銃弾をいれてない。

これしか使わないと推理したからだ。

そのまま空中で身を捻って着地、丁度ブラドと背中を向け合って立っている体勢になる。

「ゲハハハハハ！ 残念だったなあ！ この程度じゃ俺様は死なねえ！ お前が何故俺の四つ目の魔蔵の位置を把握してたのかは知らねえが、同時に壊さなけりや意味が・・・。」

高らかに笑うブラド、確かに言っている内にみるみる傷は修復していく。

「だけど・・・」

「壊しますよ？ 今からね。」

「はあ？ 何を言っ t . . .
「ほら。」

私がそう言った瞬間、ブラドの両肩、右脇腹、口内の舌、四つの魔蔵のある箇所が一斉に爆発、否、炸裂した。

「ゲボアアツ!!? な . . . なんダ . . . どうヴいう
ど . . . だあ!!」

地面に倒れ伏したブラド。

舌が弾け飛んだせいで、上手く喋れてない。

「とても単純な事ですよ、貴方に撃ち込んだ六発の銃弾の内、魔蔵に撃った四発は炸裂弾。つまりは武偵弾だったと言っただけです。」

「なっ . . . なん . . . だどお」

修復事態は一秒未満で出来ても、弾を排出するには秒単位かかるのはAKで証明済み。

ついでに魔蔵の四つ目の情報が正しい事も本人が自分から教えてくれた訳だ。

だから最初から弾倉には、上から武偵弾三発、通常弾二発、武偵弾一発の順で入れていたと言う事。

「なら 何故魔ぞヴの . . . 四つづ目の場じよ を」

「結構機密性は高かったですが、それほど苦労しませんでしたよ？ それと、知られたくないなら態々腕で庇うなんて相手に教える様な行動は控えた方がいいかと。」

「ぐ ガ . . . キイイ」

「これに懲りたら伊・ウーを襲撃なんて自殺行為は謹んでください
ね？ それでは。」

最早歩く気力すら無いブラドを放置し、艦内へと戻る。

ブラドは適当な陸地に放り出す手筈になっているので、下のメンバ
ーの誰かがやらされるだろう。

艦内に続くハッチを開け、中に降りた瞬間、鳩尾に理子と言つ名の
ミサイル弾頭が直撃したのだった。

三話（後書き）

三話目にして二年もぶっ飛んだWWW

サクサク進んでいきたいので仕方なしというところで。

それでは (^ ^)
| ^ () /

四話

「ねえ、本当の本当に大丈夫？ 無理とかしてない？」

「本当の本当の本当に大丈夫ですよ。」

ブラドを撃退した後、理子に全力タックルを無防備に喰らい、その後ずっとこの調子だ。

タックル自体は予想済みだったが、全力疾走してくるのを避けるのは危険な為、やむを得ず受け止めた次第である。

さすがに五分程悶絶したが、一応出来るだけ衝撃を拡散させていた。曾お爺様に報告に行く途中なのだが、理子は私の横でくっつく様に歩き、しきりに容態を聞いてくる。

正直、ダメージらしいダメージは理子のタックルだけなのだけど。

41

「心配しすぎですよ、私の力量はある程度知ってるでしょう？」

「そうだけど、全部って訳じゃないし。それに・・・ブラドが強すぎるって事も知ってるから、アイツが来たって知らされた時は・・・体が・・・震えちゃって・・・。」

そう言っつて俯く理子。

体も微かに震えている。

やはりまだ根本的な恐怖が拭い切れないのだろう。

「だから、マリアが戦ってるって聞いたら・・・すごく怖かった。」

「おかげで止めるのに苦労したぞ、最後は軽い錯乱状態だったしな。」

「うっ……」

「そうでしたか、ご苦労様でした。 ジャンヌ。」

「礼には及ばんさ。」

そう言つて微笑むのは、鮮やかな銀髪の女性。

ジャンヌ・ダルク30世。

二つの三つ編みをつむじの辺りで結っているストレートロングヘア。サファイア色の瞳が美しく輝いている。

研鑽派に属し、力量は最下級だが、凍結能力を持つ？種超能力者だ。ステルスまともな人付き合いが殆ど発生しない伊・ウーの中で、彼女とはよく一緒に話したりする事が多い。

「だ、だつてマリアが心配で……。」

「だからと言つて私に銃を向けるのはどうなんだ？ さすがにアレは焦つたぞ。」

「そ、それは……。」

「それに、例えお前が行つたところでどうにも出来まい？」

「……そう……だけど……。」

再び俯く。

きつと悔しさでいっぱいだろう。

「ジャンヌ。 理子も反省しているでしょうし、その辺で。」

「まったく、お前は理子には甘いな。」

「そう言つつもりはありませんが……。」

私の言葉を聞き、小さく溜息をつくジャンヌ。

無自覚か……とか思われている気がしてならない、いや私の条理推

理がそう導き出している。

そここう言っている内に曾お爺様の部屋に着き、二人と別れる。曾お爺様は、普段は滅多にメンバーと顔を合わせる事は無い。

大体が人伝に任務を与えるか、私の様な一部の者と話すだけだ。いつもの様に扉をノックし、返事の後に部屋に入る。

「予定通り、ブラドは行動不能になるまで弱体化させました。付
近の陸地に放り出したとの報告も、先程受けました。」

「そうか、ご苦労だったねマリア。」

「いえ、それほど手間ではありませんでしたので。」

「君から見て、彼はどう写ったかな？」

「実力は申し分ありません。伊・ウーの中でも私達を除けばトツ
レベルでしょう。相手を過小評価しすぎる部分には懸念が残
りますが、それを補って余りあるものだと思います。」

「ふむ、そうか・・・。」

これが私の評価。

曾お爺様も、頷いて手元の書類に目を戻す。

「ですが・・・。」

「うん？」

再び私を見る曾お爺様。

心無しかワクワクしている様に見える。

「個人的には、自己中で猿山の大将で幼女監禁癖の変態ストーリーカー
吸血鬼だと思います。」

少しだけ、沈黙が流れた後・

「ふふふっ、あっはははははははっ！　・・・ふっふっふっふっ
くくっ・・・。」

口元に手を当て、心底愉快そうに笑う曾お爺様。

もう片方の手で腹を抑えており、まさに腹を抱えて笑っている状態だ。

扉の向こうに誰かがいたら確実に聞こえそうな音量で笑い続ける。

目元に涙すら浮かんでいる始末。

「笑いすぎですよ。」

「ははっ、すまない。いや、彼を目の当たりにして尚そう言えるのは、君を含めて世界に何人いることだろうね。」

「案外かなりの数いるのでは？　彼は別に世界トップクラスの実力、と言う訳ではありませんし。」

「まあ、それはそうだがね。」

目元を拭き、しかしまだ笑顔が抜けきらない状態で紅茶を一口飲む。一息付いてから、机の引き出しから一丁の銃を取り出し、ゴトリと音を立てて机の上に置いた。

黒塗りの回転式拳銃で、見るだけで威圧感を感じそうな気さえする。

「あ・・・これは？」

「見ての通り、S & a m p : W M 5 0 0 の 8 インチモデルだよ。君なら一目で分かるだろう？」

「いや、それは分かりますけど・・・。」

何故そんな物を出すのですか？
世の中で最強の拳銃だとか言われたり言われなかったりする様な代物を。

ハッキリ言つて嫌な予感しかしないのですが・・・。

「君は以前から決め手になる手段が欲しいと言っていたね？」

「まあ、確かに言いましたが・・・。」

私は基本、先程使つたベレッタしか常備していない。

元々女で体型も小柄、さらにまだ十二歳と言う事もあり、必然的に大きな銃は邪魔なのだ。

と言うより私自信の好みの問題もあるのだが、妙にシツクリこないまあ、そうでなくとも四六時中ライフルだの持ち歩いてる人間なんてそうは居ないだろう。

「伊・ウーの大半は、何かしらの能力を持つステルスであつたり、理子の様な色金所持者です。ですが残念ながら、私にはそう言つた決定だになる力はない。」

正確には、ある。

ここは元々、そう言つた手段を教え合う場所なのだから。

当然私も、色々な技術や能力を教わっている。

だが、私が覚えた能力の数々は、曾お爺様程ではないとは言え、かなりの数になる。

そんな物を公に使いまくる訳には当然いかない為、よっぽどの事が

無い限りは封印している。

受け継いだ条理推理だけでも戦術は無敵大なので、はっきり言って表では一度も使わなかった。

と言うよりも、私は超能力を使って戦うのが苦手なのだ。

人並み以上に使えはするが、好みでも言うのか、何故だかどうも性に合わない。

曾お爺様も少なからず感じていると以前言っていた。

生来のステルスじゃないのが原因だろうと思われるが、詳細は言及してない。

「だから、公に使える手段としてこれを用意したと言う訳だ。」

「十二歳の少女に渡すものじゃないですね。」

世に出た時に、「安易に使用した場合、射手の健康は保証できない。

」などと言った事を堂々と宣言された代物なのに。

「普通の子供ならそうだろうが、君なら何の問題もない。」

「それはそうですね。。。」

要は怪我をしない最適の撃ち方を導き出せばいいのだから、それをすれば危険なんて毛ほども無い。

銃を手に取り、感触を確かめる。

既に弾は装填済みの様で、ズッシリとした重みを感じる。

今では4インチの方が反動が弱かったり、ES等の物が出ている。時世。

何故このモデルをチョイスしたのか色々疑問だが、恐らくこの人の

趣味だろう。

「では、有り難く使わせてもらいます。」

「そうしてくれ。そのテーブルの上に置いてあるケースに弾薬を入れておいた。」

指さされた先、テーブルの上に小さなショーカーケースが置いてあった。言われた通り、開けると500S & amp; Wマグナム弾がピツシリと入っていた。

一般人がみたら顔が引き攣りそうな光景である、一部の人は目を輝かせるかも知れない。

「では早速だが、その慣らしもかねて任務をこなして貰いたい。今回は色金関連だ。」

今度は引き出しから書類を取り出し、差し出してくる。

受け取って見ると、どうやら建物の設計図や警備装置などの詳細データのようなようだ。

「この場所に色金か？」

「そうだ、それもそこそこの量が保管されていてね、当然他の組織の多くが狙っている。」

色金はどこの組織も喉から手が出る程欲しい宝だ。むしろよく今迄無事だったと賞賛するべきだろう。

「必然と、警備は相当ですね。」

「ああ、ステルス対策も十全な為、力でゴリ押しと言うのも難しい。加えて最近りりいるかねは琉璃色金の粒子の影響が現地で強まっていてね、多

くの組織が手をこまねいている状態だ。」

「その隙に頂いてしまおう、と。」

「そう言うことだね。」

ほんの少し口元を釣り上げてニヤリと笑う。

曾お爺様がこう言うイタズラ紛いの任務を伝える時、子供の様なワクワクした様子でいる事が多い。

やっぱり緋弾の資格者は子供っぽいと言うのは確かだと思う。

「以上だ。詳しい情報は道中に書類に目を通すといい。」

「わかりました。早急に向かいます。」

「頼んだよ。」

部屋を出て、準備の為に自室に向かう。

用意するのは変装道具一式くらいしかないが、途中で理子には言うておかないと後で拗ねる。

案の定私の部屋でポッキーを食べていた理子。

ジャンヌも一緒に食べていて、イチゴ味とチョコ味のどちらが美味しいかで口論していた。

「あっ！ マリアお帰り〜　ねえねえ聞いてよ！ ジャンヌつて

らポッキーはイチゴが至高だなんて言うんだよ！？　チョコを差し

置いてイチゴだなんて笑止千万だよね〜？」

「何を言うか、時代とは常に変わり続けているのだぞ！？　こうし

てイチゴが開発された理由。　それは製造側の人間たちが、次の主

人公はイチゴしかないと判断したからに他ならない！！」

「ブツブウー！ イチゴなんてポッキーでもトツポでも後手にしか出されない予備軍だもんねえ〜〜〜！！ どちらでも先陣として一番手を任されるチョコには足元にも及びませ〜〜ん？」

「くうう！！ 貴様とてイチゴ味を食している癖に、何と言つ言い草だ！！ イチゴに謝れ！！」

「確かにイチゴも美味しいし好きだけどお〜、チョコが一番なのは絶対に譲れないもんね〜？」

果てしなくどうでもいい議論でギャーギャーと騒ぎ立てる二人。どうでもいいけど、人の部屋でやるのは止めて欲しい。

「くそっ！ おいマリア！！ この不埒ものに何とか言っつてやれ！！」

「そうだよマリア！！ そのアマチュアちゃんにガツンって言うてあげないと〜！！」

矛先を私に移し、詰め寄る理子とジャンヌ。だけど・・

「残念ですが私はポッキーよりもプリッツ派です。」

「な・・なんだってえ〜〜〜！！！！？」

因みにサラダ味。

「まっさかマリアがポッキーよりもあんな歯の間に詰まってウザイつたい棒なんかが好きなんて！！」

「くっ、思わぬ伏兵に誑かされていたのか！？」

「・・・なんですって？」

聞捨てなりませんね。

「確かに、プリッツは齒に詰まると厄介である事は間違いないですね。ですがそれは素人に限った話です。正しい食し方をすれば、またたく間にひたすら美味しいだけの棒に大变身なのですよ？」

「ええ〜？ プリッツなんてどうやって食べても同じ末路でしょ〜
〜？」

「私もそれは同感だ。色々工夫してみたが、結局は齒に詰まるのを阻止する事は出来なかった。」

「ふっ、それこそアマチュアの領域ですね。真のプリッツァーになれば、毛ほども詰まる事無く味わう事が出来、周りで悪銭苦闘している友達をみて優越感に浸る事も可能なのです。」

「プリッツァーって何！？ というかそれって只の性格悪い奴じゃん！」

「それよりも、本当にそんな事が可能なのか？ そしてそんな奴がどれだけ居るのだ？」

「出来ます。一口一口の力加減、それによって砕けた粒子の口内での流れを正確に読み取れる事で、初めて辿り着ける境地です。因みに私と教授意外に出会った事はありません。」

「お菓子を食べるのにそんな高度な技術がある時点でダメでしょ！
？ そんな気の休まらないお菓子なんて理子は認めないよ〜！」

「それに結局居ないではないか！ お前と教授しか出来ない時点で、世界に五人もいれば奇跡だぞ〜！！？」

それからなんやかんやと口論を続け、結局二人に任務の事を話して
現地に出発したのは、それから三時間後の事でした。

四話（後書き）

プリッツって美味しいけど詰まりますよねー。

いつかきつと極めしプリッツァーになってみせますwwwwww

それでは (^ ^)
| ^ |
/ ^ ^ \

五話

イタリアのローマ市内。

世界最小の主権国家、バチカン市国。

十二月と言うこともあり、肌寒い夜の風が体を震わせる。数時間前まで雨が降っていた故に、地面がぬかるんで不安定だ。

そんな中、バチカン宮殿の内部、バチカン美術館の中庭を歩く影があった。

数は一つ、小柄であることから若い年代であると伺える。

しかし、今は昼間ではなく夜中である。

夜空には満月が怪しく輝き、中庭を不気味に照らしている。

昼間ならまだしも、とてもじゃないが人が訪れるような時間帯ではない。

しかし人影は悠々と中庭を歩き、真っ直ぐに目的の場所へと向かっている。

外見もまた異様であり、真っ黒のロングコートにデカイフードを深くに被っている。

他にも黒い手袋にブーツと、目に見える範囲が全部真っ黒な格好。

極めつけには顔全体を覆うような黒い仮面を付けており、三日月のように歪んだ模様が口の位置にある。

いふなれば、口だけ付いたのっぺらぼうが不気味に笑っている形相。

その口の模様だけが血のような真っ赤な色で、それがさらに不気味

さに拍車をかけている。

そんな不気味な、というよりも奇っ怪なと言える風貌をした影が辿り着いたのは、システイーナ礼拝堂。

これまた堂々と中に入り、一瞬たりとも止まる気配すら見せずに祭壇の所まで辿り着く。

歴史的な壁画や天井画には目もくれず、祭壇の裏側に回ってゴソゴソと何かを探り出す。

暫くするとカチツと音がなり、祭壇の下の床の一部が開いた。

そこにあつてのは近代的な操作パネル。

0から9の数字が羅列し、その上に細長い画面が付いている。

影はそれを確認すると、凄まじい速さで数字を打ち込み始めた。

プロのキーボード操作も真っ青なスピードで、既に打ち込んだ数の桁は四十を超える。

僅か数秒で気の遠くなるような桁のパスワードを入力し、右下にあった赤いボタンを押す。

小さくピーという電子音が鳴り、画面にCOMPLETEの文字が表示される。

するとパネルが自動で閉じ、代わりに影がしゃがみ込んでいるすぐ後ろの床が、微かな振動を起こしながらゆっくりと開いていった。

影は立ち上がってそこに出来た階段を見て、仮面の下で微笑みながら降りていった。

「礼拝堂の地下深くに、こんな場所があったんですね。」

たどり着いた地下で、私は静かに呟いた。

二日前の夜中、やっとの思いで理子とジャンヌとの論説戦を制し、曾お爺様からの任務を達成するためにローマに来た。

理子からは、とにかく美味しいチョコがあれば片っ端から持って帰って欲しいと頼まれた。

ジャンヌも、イチゴ系があれば同様に、との事。

めったに外出が出来ないジャンヌや、時々空いた時間の暇潰しを提供してくれる理子の頼みである。

多少であれば時間を割いても問題は無いだろう、任務自体を速く済ませてしまえばいい話だ。

地下施設中を、靴音を響かせながら進んでいく。

先程までいた礼拝堂とは異なり、今私のいる空間は、現代技術がい

かんなく使用された機密施設特有の様相を現している。

飾りっ気の無い無機質な通路、足元を僅かに照らすだけの簡素な証明。

正面に向かって廊下が伸びているだけで、特にこれといった意匠の類は見受けられなかった。

ひたすら廊下を歩き、五分ほど進んだ後、道の終わりが見えてきた。一本道の行き止まり、周りと同じくシンプルな扉があり、私は迷わず開けて中に入る。

中は廊下よりは広くなっており、小さな部屋といった感じた。

ドアは私が入ってきた所以外には一つもなく、ここで終着のようだ。

そして、部屋の中央、ガラスケースの中にポツンと置かれているビームサイズの物体があるのみ。

「なるほど、確かに中々の質量ですね。純度はさほど高い訳ではないようですが。」

それに近づき、懐から曾お爺様に貰ったS & amp; Wを取り出す。まずは一発撃つ。

しかし弾はガラスケースにはじかれ、跳弾して部屋の隅へと飛んだ。

「防弾仕様、しかし硬度不足ですね。殆どオマケ程度の物ですか。」

ケースは先程の一発で、撃たれた面が薄くひび割れている。

もう一発撃つと、今度は弾のが先端だけめり込んで停止した。

続いて二発、三発と撃ち、めり込む深さが増して、ケースのヒビも網目状になっている。

撃った弾丸は、それぞれを線で結ぶと三角形になるような位置に撃たれており。

私の目線で見ると三角形の丁度真ん中に色金が入る様になる。最後一発をその真ん中に撃ち込む。

ケースは粉々に砕け、中の色金が弾丸に弾かれて宙を舞う。

私は銃の薬莢を取り出し、新たに弾を入れた後、銃をしまふ。

そして丁度顔の前に落下してきた色金をキャッチする。

目の前にかざして観察する、500S & Wマグナム弾をくらっているにも関わらず、傷一つ無い。

「ふむ・・・どうやら間違いなく本物のようですね。」

頷いてポケットから小さな箱を出して色金をしまふ。

箱をポケットにしまい、部屋を出て廊下を引き返して行く。

「それにしても、あっけないですね・・・。」

小さく呟く。

曾お爺様が警備が厳重と言ったこの場所。

何処が厳重なのかと言うと、実はこの廊下なのだ。

ここは、意外にもそれほど最新鋭技術をふんだんに使った要塞と言う訳ではない。

そもそもこんな礼拝堂の地下に隠すこと自体が超秘匿扱いられており、現にこの場所は作られてから実に十年も存在を隠匿してきた場所だからだ。

そんな所には当然、あからさまな警備はむしろ邪魔であり、存在を吹聴している様なものだからである。

しかし、それだけならどの組織も手をこまねいたりはいしない。

既にこの場所は多くの組織が知るところであり、後は侵入さえ出来ればいいのだから。

では、何がそこまで侵入者を拒んでいるか。

それはこの地下施設自体の構造にある。

施設の建造に使われている資材の全てが、特殊な合金素材で出来ており、徹底的に頑丈な造りになっているのだ。

それこそ核シエルトの数倍に匹敵する程にだ。

それにより、必然的にセキュリティを掻い潜って正面突破するしか道は無い。

そして肝心のセキュリティも恐ろしい物であり、余りにも多すぎて詳細は省くが、おびただしい程の数なのだ。

一つ一つが対人用とは思えない凶悪さであり、それが普通に歩いて五分かかる通路に所狭しと配置されている。

まさにネズミ一匹入らせないと叫ぶ状態。

そして、それを管理する端末が外部から完全に独立しており、ハッキングすらままならない始末。

ならばステルスを使っと思っただろうが、それはもう論外の域だ。

この施設全体に、ステルス能力を封じる時に用いる手錠と同じ性質の金属がふんだんに使われている為である。

この影響により、この施設内ではステルスは満足に能力を使えない。まさに金庫のように単純で、故に堅牢な保管場所なのだ。

そして、何故そんな場所のセキュリティが、私が通った時に作動しなかったかと言うと。

簡単に言ってしまうえば、曾お爺様が直々にハックして解除したからだ。

専門知識の領域なのでまた説明は省くが、世界一の頭脳に不可能は無いとだけ言っておこう。

矛盾がある事は承知しているが、これで納得して貰えば幸いだ。

「しかし、ここまで順調だとかえって不気味です。」

順調なのはいいことだけど、何かあるような気がしてならない。確か理子が言うには、こういうのをフラグとか言うのではなかったか？

何もなさすぎるのは何かある前振りだとか言っていた筈。

私はホームズ家において直感を受け継がなかった為、事前に危険を察知する事は出来ない。

故に、感じる危険を元に先の展開を推理するのは無理なのだ。

「物心付いた時から論理的にしか思考出来ない私にとっては、直感とは理解できない感覚ですね。」

何となくそう感じるなどと言うのは、本人以外からすれば疑わしい以外の何者でもない。

証拠も根拠もないのにいきなり信じる、なんて言うのはただの押しつけだ。

「まあ、こう言う風にしか考えられないから、私は姉さんのパートナーには相応しくないんでしょうね・・・。」

少し声が自虐気味になってしまった。

推理力がなく、直感だけを受け継いだ姉さんは、それを頼りに武貞として活動していくだろう。

そしてそれは姉さんにとって大きな力になり、いずれ出会うパートナーと共に事件お解決する為の鍵となるんだろう。

己の直感を信じて突き進む姉さん、論理的な思考に基づいて歩く私。

確かに、噛み合わないだろう。

「さつさと帰りますか・・・。」

妙な思考を振り切って進む。

降りてきた階段を昇り、礼拝堂の祭壇の場所へと出る。

そのまま出口に向かう筈だったが、周りから感じる視線に立ち止まる。

やっぱり、嵐の前の静けさと言うものだったようですね。

『さつさと出てきたらどう？ とっくに突撃準備は終わってるでし

よ』

理子の変声術を使い、成人女性の声に若干エコーが掛かった様な声で語りかける。

昼の内に通りを歩いた際、適当な女性の声を覚えのた。

「毎度毎度、女だったり男だったり。老人だったり子供だったり
と、気味の悪さは相変わらずだな。」

『気になるなら、この仮面を剥がせばいいだけの話でしょう？ 出来れば、だけどね・ふふっ。』

私の正面に出てきたのは、二十代半ば程の男。

フリッグとして活動し始めた頃から、何度か見かけた武偵だ。

確か名前はローグ・ハルウエン。 アサルト強襲科のSランクだ。

「しっかし、まさか本当にこのセキュリティが突破されるなんてなあ、是非ともどうやったのかブタ箱の中で教えていただきたいんだが？」

『謹んで遠慮させてもらうわ。私の方こそ、何故ここにいるのか聞かせて欲しいわね。』

先程言ったように、ここは通常の警備体制は敷かれていない。

カメラや警備委員、検問等の類は皆無だ。

宮殿自体の出入口なら衛兵くらいはいるが、こんな深くまで、しかもSランクの武偵なんかがいる筈はない。

勿論、私は犯行予告なんて怪盗みたいな事はしていない。

故に、こんな狙った様な警戒体制があるのはおかしい。

私の脳裏に、一人の人物が浮かぶ。

直感はないが、嫌な予感とやらが今回だけはハッキリと感じられた。

「なあに、匿名で今夜お前がここに保管されている超貴重品を盗むって言うたれ込みが上の方であったそうだな。疑わしいにも程があるが、来るのがお前で、尚且つ貴重品とやらが相当大切にしてくな。俺らに命令が下ったって訳だ。」

『なぐるほど・・・ねえ』

曾お爺様・・・あなたですよ・・・。

絶対間違いない、あの人は今回、この任務を銃の慣らしも兼ねてと言っていた。

さっきまでの作業程度では到底慣らしたとは言えない。

だから色金を取ってくるついでに直接戦闘で慣れろと言っわけだろう。

戦闘でと言っただけならまだいい。

實際理になっっているのだから。

でも・・・。

「さつてえ、お喋りもここまでにして、そろそろお縄に付いてもらおうか?」

『縄は嫌だけど、始めましょうか。ようやく私を囲む配置は終わったみたいだし?』

「流石にお見通しってか、なら行くぞ!」

その言葉と共に、一気に銃を抜いて発砲するローグ。

銃口から弾道を読み取り、最小限の動きで躲す。

次いで私の後ろ、四時と八時の方向から駆けてくる二人の武貞。
一人はバンダナを巻いた顎に傷のある三十代程度の男。

もう一人は対照的に、細身で速さ重視の動きをしていて、優男風の顔立ちえおしている。

どちらも似通った戦闘スタイルのようで、発砲しながら片手にナイフを構え、それぞれが切りつけて来る。

それも見切り、躲しながらベレッタを抜いて一発つつ腹に撃ち込む。呻き声を上げながら後ろに跳ぶ二人。

さらに追撃をしようとした瞬間、右側面から弾幕が張られ、咄嗟に身を低くして走る。

横目で見ると、ライフルを構えた武貞が二人、柱の影から援護射撃をしていた。

最初から援護に徹しているようで、距離を詰めてこようとはしない。そちらに三発程撃ち込み、一旦弾幕を途切れさせる。

『なる程、不確かな情報の確認の為にわざわざ武貞を五人ねえ。

それもSランク三人とAランク二人ってところ？ まあ随分と大げさなこと。』

一連の動きを見た限りでは間違いないだろう。

とても銃を慣らす程度に相手にするような戦力じゃない。

帰ったら愚痴の一つでも言っちゃらないと気が済まないですね。

別にヤバイ状況って訳でも何でもないのだけね。

「だろう？ 俺もそう思ったんだが、どうやらお偉いさん方は余程

その貴重品とやらが大事らしいな。まあお前がこうして居るんだから珍しく良い判断だったって訳だ。」

言いながら再び突っ込んでくる。

他の二人も同様で、援護の二人も両脇に回り込んで機会を伺っている。

「何かも解らない物を守る為に駆り出されるなんて、武偵も大変ねえ。」

「そう思うなら大人しく捕まってくれや！」

「いや。」

銃弾とナイフを躲し続け、先に両脇の援護役二人に発砲。

Sランク三人と戦いながら撃つ余裕なんて無いと思ったのだから、弾丸は二人の右肩と右膝に命中し、両方とも床に膝を付いた。

防弾装備だろうからダメージは無いだろうが、相当な痛みが襲っている筈。

暫くは立てないだろう。

「まず二人。」

「化け物っぷりも相変わらずだなあ！！！」

舌打ちをして、今迄よりも多く銃弾を発砲してくる三人。

時折こちらにも相手の関節部や利き腕の肩に銃弾を撃ち込みながら、確実に体力を削っていく。

しかし、流石はSランクと言った所か。

何発も銃弾をくらい、苦しげに声を漏らすものの、歯を食いしばって耐え、戦闘を継続する。

二発で崩れたAランク二人とは格が違う。
まあ先程から回復し始めたのを、定期的に撃って立たせない様にしているのだけだ。

この間も、三人の攻撃は続いており、戦闘開始から十分ほど経っている。

銃弾をくらい、全力戦闘を続け、三人は息が荒く、ローグ以外の二人は限界が近いようだ。

しかしそれでも追撃を止めない、今ここで止めれば私に逃げられると分かっているから。
だが、いくらやってもかすり傷一つ付けられない。

三人の攻撃が、私には手に取る様に解る。

弾道も連携もナイフの軌道も、数秒先まで透ける様に解るのだから、後はそれに沿って体を動かせば、自然に避けられる。

『随分息があがってるわねえ、一旦休憩させてあげましょうか？』

「素敵な提案だが断るよっ！ 今日こそテメエに一撃ぶち込んでやる！！」

『あらそう？』

ローグの一閃を躲し、身を低くして一気に三人の足を払う。

全員が攻撃直後だった為に反応できず、三人の体が宙に浮く。

払った勢いをそのままに、回転しながら右手でS & amp; Wを取り出す。

そのまま回りながら、銃を構え、左からバンダナ男、ローグ、優男の順に鳩尾に至近距離で撃ち込んだ。

「グウハツ!!」

「ガアア!!」

「グウウツ!!」

三人がそれぞれの方向に吹っ飛び、木製の椅子や机などに激突しながら転がっていく。

やがて音が止み、礼拝堂が静寂に包まれる。

武貞五人分の呻き声が、微かに聞こえるのみ。

私はローグの元まで歩き、しゃがんで顔を覗き込む。

『アハハッ、流石にこれの弾は我慢出来ないか。』

「テ・・メエ、そんなもん持ってやがったのか・・。」

『今日が初使用だけどねえ、御陰でいい慣らしになったよ。 ありがとう。』

「クソ・・があ・・。」

そう言って気絶するローグ。

他の三人も気絶しており、Aランクの二人が柱の所で蹲っているだけ。

まあ、後二十分は動けないだろうし、いいか。

『今宵は無限罪の御宿りの祭日。 聖母に抱かれる夢でも見れたらいいわねえ。』

礼拝堂を出て、月を見上げながら歩く。

聖母がイエスを孕んだ日に、同じ名の犯罪者に現代の至宝を盗まれるなんて・・・

「なんとも、皮肉な祭日になりましたね。」

五話（後書き）

基本的にwikiからの知識でやってるんで、何か間違いがあったりするかも知れないです。

これはちやうやろって所があれば言ってくれとありがたいですw
w w

それでは (^ | ^) /

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4169ba/>

緋弾のARIA 交わらぬ姉妹の道

2012年1月14日13時59分発行